



「言葉の力」を中核とした学校づくり ②

言葉をめぐる認識の転換

「言葉の力」を学校づくりの中核に据えるに当たり、押さえておきたいことがあります。それは、従来日本人の多くが「言葉の力」を信じてこなかった、という指摘です。

言葉への信頼については、コミュニケーションを通して形成される面が多いため、日本人の従来のコミュニケーションに関する特性について捉えることが必要です。

日本人は長い間、コミュニケーションに対する二つの態度や認識を有してきました。

一つは、**ことさら言葉に出さなくても相手に通じるはずだ、という態度**です。

もう一つは、「**話せば分かる**」という認識です。この言葉は、五・一五事件で、時の首相が語ったとされています。そこには、多くの日本人がコミュニケーションに対して抱いてきた認識が含まれています。

こうした日本人のコミュニケーションに対する態度や認識は、我が国にコミュニケーションに相当する和語が存在せず、長く「伝達」と訳されてきたことにも表れています。

価値観の多様化、情報化、国際化が急速に進む現代社会において、こうした態度や認識が通用しないことは明白です。小さな社会である学校においても、**一方的な「伝達」から「通じ合い」へと、言葉をめぐる認識の転換**が求められています。



その道

大リーガー 大谷翔平

その道は、まだ見えているようで見えていないと思いますね。教わる先輩もいないですし、自分で1個1個やるべきことを見つけて作っていかなければいけない。

出典：「大谷翔平は、こう考える」（桑原晃弥著 PHP文庫）

※ 「その道」は、投打の二刀流。「とことんまで『どちらも伸ばそう』と考えるようにしています」と、大谷選手は語っています。